



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

四旬節第五主日A年（2026年3月22日）

よみがえりと復活

主任司祭 小西広志神父

今日の福音でラザロは墓の中から「よみがえり」ます。生き返ったのです。イエスさまは死んで三日目に墓の中から「復活」します。「よみがえり」と「復活」は果たして同じものなのでしょうか。

「よみがえり」は動詞「よみがえる」の連用形が名詞化したものです。「よみがえる（甦る、蘇る）」はもともと「黄泉(よみ)から帰る」の意味だそうです。そこから①死んだ人、死にかけた人が、息を吹き返す。生き返る。蘇生する。②衰えたものがまた盛んになる。という意味が生まれます（三省堂、大辞林第三版）。ラザロは、死者の中からよみがえりました。生き返ったという意味です。生き返った後のラザロはどうしたのでしょうか。恐らく姉妹のマリアとマルタと過ごしていたことでしょう。しかし、やがて寿命が尽きて死んでいったと思います。

しかし、イエスさまの「復活」は違います。父なる神はイエスさまを死者の中から立ち上がらせました。そして、イエスさまは永遠に生きるものとなったのです。イエスさまの死と復活は、いのちは死によって制限されないことを表しています。今日の福音でイエスさまは、兄弟の死に泣き悲しむ姉妹たちにいのちは死では終わらないことを悟らせ、永遠のいのちへの希望があることを教えようとなさったのでしょうか。

今年も復活祭には多くの方々が洗礼を受けることでしょう。洗礼は、神の子としての新しいいのちへと生きることの始まりです。洗礼志願者はイエスさまと共に古いのちに死んで、死者の中から立ち上がらせていただいた復活のイエスさまと一緒に新しいいのちを生き始めるのです。

第一朗読：エゼキエル書 37章 12 - 14 節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 8章8－11節

福音朗読：ヨハネによる福音書11章1－45節

『ヨハネによる福音書』では、イエスさまがなされた不思議なわざを「しるし」と言います。今日の同録箇所にあるラザロのよみがえりの物語は、一連の「しるし」の最後に位置づけられるものです。言葉に注目して、味わってみましょう。

1 節： ベタニア

『ヨハネによる福音書』には「ベタニア」という地名が複数回登場します。「これは、ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であった」（1章28節 フランシスコ会訳）。この「ベタニア」と、マリアとマルタが住んでいた「ベタニア」とは異なる場所です。今日の朗読にある「ベタニア」はエルサレム南東およそ3キロメートルのところにある。村です。18節に「ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほど離れた所にあった」と記されています。1スタディオンはおよそ185メートルだそうです。

24 節： 終わりの日の復活の時

死者の復活については、比較的新しい時代の考え方だったようです。イエスさまの時代、サドカイ派の人々を除いて、一般的なユダヤ人は死者の復活を信じていました。

33 節： 憤りを覚え、興奮し

フランシスコ会訳では、「心に憤りを覚え、張り裂ける思いで」となっています。岩波書店の訳では「心の深いところで憤りを覚え、かき乱され」となっています。直訳すると「霊において憤慨する」となります。これは言葉の調子などによって怒りや感動を表すという意味だそうです。厳しく命令するという意味もあるそうです。「興奮し」は12章27節でも、13章21節、14章1節、27節でも使われています。十字架の死に向かうイエスさまの心情を表す言葉かもしれません。

39 節： 主よ、四日もたっていますから、もうにおいます

パレスチナ地方では人が死ぬと、その日に葬式が行われていたそうです（例：使5章5-6、10節）。ユダヤ人は死者の魂は死後三日間死体の周りをただよっているが、四日目には魂は立ち去ってしまうと考えていました。ですから死後四日目頃から死体の腐敗が目立つようになると、もはや死者のよみがえりはないと考えられていました。